

# 体育哲学原理<sup>1)</sup> とは何か

——方法論に着目して——

金 炫 勇

(受付 2018年10月30日)

## 1. はじめに

### 1.1 体育・スポーツに渦巻く諸問題

いま、体育・スポーツ<sup>2)</sup>は、われわれの日常生活のなかで最も身近なものの一つとなっている。玉木(1999)は、スポーツの展望について、「テレビのスイッチをひねると、いつでも、どこかのチャンネルで、必ずスポーツ番組が放送されている。世界のニュースのトップ項目が、スポーツの話題であるというのも、けっして珍しいことではない。ビッグ・スポーツ・イベントが、国内大会、国際大会ともに、目白押しに開催され、新聞にも雑誌にも、スポーツ情報がつねに満載されている。これほどスポーツが繁栄した時代は、過去にない。おそらく将来も、スポーツは『暴走』といえるほどに繁栄しつづけることだろう」<sup>3)</sup>と述べている。これは約20年前スポーツ評論家・玉木氏の「スポーツ予言」ともいえるものであるが、体育・スポーツは、今日、さらに繁栄・隆盛しつづけ、社会のなかで重要な位置を占めている。

だが、体育・スポーツ界に渦巻く問題も後を絶たず、根本的な改革を求める声が高くなっている。友添(2016)は、スポーツ界をめぐる諸問題について、「競技団体の監督・コーチによる暴力行為、競技団体による補助金の不正受給、Jリーグでの人種差別行為、プロ野球選手による野球賭博や覚せい剤使用、未成年選手による大麻吸引等などの問題が起こるなど、(中略)スポーツの世界での不祥事が後を絶たず、現代のスポーツは危機に瀕している」<sup>4)</sup>と

---

1) 1955年「体育原理」としてスタートしたが、2005年日本体育学会総会において、「体育哲学」へと名称変更された。大橋ほかは、著書で「体育哲学原理」と名づけている。大橋道雄・阿部悟郎・服部豊示『体育哲学原理——体育・スポーツの理解に向けて——』(不味堂出版, 2011年)。

2) 体育とスポーツの定義は、厳密に言えば、違うものの、今日社会(マスメディアを含む)だけではなく、学校教育においても区別されず、同意語あるいは連用語として使われている現状である。また、体育とスポーツに関連する学術学会である「日本体育・スポーツ哲学会」においても連用語として使われている。

3) 玉木正之『スポーツとは何か』(講談社現代新書, 1999年), 3頁。

4) 友添秀則・岡出美則『教養としての体育原理——現代の体育・スポーツを考えるために——』(大修館書店, 2016年), まえがきiii頁。

指摘している。そして、この問題はいまなお後を絶たない。ここでは、2018年1月から9月までの主な不祥事ニュースを取り上げてみよう。まず、ピョンチャン五輪期間中の2月、日本のショートトラック代表の一人から、ドーピング検査で禁止薬物のアセタゾラムドが検出され、代表認定を取り消される事件が起こった。この事件は過去の五輪で一人も薬物違反者を出していないクリーンな日本にとって初の五輪での違反例となった<sup>5)</sup>。そして、4月にはレスリング女子で五輪4連覇を達成した伊調馨らに対する日本レスリング協会強化本部長のパワハラ行為が、第三者委員による聞き取り調査で認定され、マスメディアを騒がせた<sup>6)</sup>。そして、5月には日本大学のアメリカンフットボール選手が、関西学院大学との定期戦で危険な悪質タックルをし、相手選手を負傷させる事件が起こった。そして、この一連の事件を受け、スポーツ庁の鈴木大地長官は、6月15日に、「スポーツ・インテグリティ（健全性や高潔性）確保のために」と題したメッセージを発表した。スポーツ庁は、このメッセージをとおして、「勝利至上主義や行き過ぎた集団主義、科学的合理性の軽視などといった日本のスポーツ界のあしき体質が問題の背景にある」<sup>7)</sup>と指摘した。だが、その後も、体育・スポーツ界をめぐる不祥事問題は後を絶たず、8月には日本ボクシング連盟・山根会長の不正疑惑や過去の暴力団関係者との交際が問題視され、辞任する事件が起こった。さらに、同月20日にはジャカルタ・アジア大会のバスケットボール男子日本代表4人の選手が、日本代表の公式ウェアを着たまま歓楽街に行き、買春行為をしたことが発覚し、代表認定を取り消される事件が起こった。また、同月29日には日本女子体操・宮川紗江選手が記者会見を開き、日本体操協会の暴力行為とパワハラ行為を告発し、日本体操界を大きく揺らがした。このような体育・スポーツ界をめぐる不祥事問題は、本来体育・スポーツがもつ教育的可能性<sup>8)</sup>に対する信頼を底から裏切ることになりかねない。また、2年後に迫った東京五輪を考えると、体育・スポーツ界の根本的な改革が急務であるといえよう。

## 1.2 体育哲学原理の必要性と課題

では、体育哲学原理（以下、体育哲学）とは何か。日本体育学会（2013）は、「（体育・ス

- 
- 5) 増島みどり「禁止薬物でクリーンといわれてきた日本で、冬季五輪初の陽性反応、相次ぐ不祥事」（朝日新聞 DIGITAL, 2018年3月8日付）
  - 6) 柴氏に権力集中、組織にひずみ 協会、監督の甘さ認めるレスリング・パワハラ（朝日新聞 DIGITAL, 2018年4月7日付）
  - 7) 野村周平「鈴木長官、敗者が胸張れる空気に、相次ぐ不祥事受け」（朝日新聞 DIGITAL, 2018年6月17日付）
  - 8) 杉本厚夫『体育教育を学ぶ人のために』（世界思想社、2001年）、308頁。杉本は、体育・スポーツをとおした教育的可能性を次のように整理している。健康教育、仲間関係から学ぶ社会性教育、競技の達成・成果から学ぶ自己評価の強化、表出（表現・構成）から学ぶ美的教育、身体の体験から知覚能力の発達、緊張（危険・冒険）から学ぶ体験教育など。

スポーツにおける)あらゆる事象に批判的・分析的な眼差しを向け(現状批判, 現状分析), それらの本質を根本原則から理論的に理論化しようとする知的営為である<sup>9)</sup>と記している。また, 川村(1974)は, 体育哲学の役割について, 「多くの哲学者たちの思想から, 体育や身体の意義や本質を探求することは, 現代の体育を考えるうえに大きな手がかりを与えてくれるにちがいない<sup>10)</sup>と述べている。また, 佐藤(2000)は, 体育哲学の役割について次のように整理している。①体育学そのものの学的な専門性を基礎づける。②体育・スポーツの諸事象の現状を批判的に分析し, もし問題があるようなら, 明晰な理論的分析を加えてしかるべき解決の方向性示すことである<sup>11)12)</sup>。つまり, 体育哲学が果たすべき役割は, 体育・スポーツにおける諸事象(不祥事問題を含む)に対して, その根本的かつ本質的な問いを問いかけ, その結果として正しい方向への回答を示すことである。

一方, 反知性的とみなされる体育・スポーツと, 反身体的とみなされる哲学との結びつきがはたして成立しうるのか, といった議論もある<sup>13)</sup>。これについて, 佐藤は, 「対象とする事実の合理的な説明能力と現実への適切な対応能力を示すことで, 広く社会的認知を獲得するところから生まれてくる<sup>14)</sup>と指摘している。また, 日本体育学会(2013)は, 体育哲学の学問としての困難性とその解決策について, 「哲学的研究方法自体を習得することの難しさにあるが, 第三者による検証に耐えるには, 他の学問分野と同様, 方法論の明確化が不可欠である。体育哲学の根本課題は, こうした検証可能な方法論に基づいて, 体育理論・体育実技の現状を批判的に検討しつつ, 『体育とは何か』という問いに『概念の同一的で不変な意味』のレベルにおいて応えることである<sup>15)</sup>と指摘している。つまり, 体育哲学が広く社会的認知を得るためには, 適切な方法論と現実離れしない研究領域が大事になってくる。

では, 体育学者らは, 体育哲学の研究領域をどのように捉えているのか。前川(1970)は, ①体育とは何か(体育体質論), ②指導とは何か(体育対象論), ③体育をとおした教育とは何か(体育可能論), ④体育の目標とは何か(体育目標論), ⑤体育の目標を達成する内容とは何か(体育内容論), ⑥具体的な方法とは何か(体育方法論), ⑦評価の原理・原則とは何か(体育評価論)など, 諸事象の根本や本質を究明することである<sup>16)</sup>と述べている。また, 日本体育学会(2006)は, 体育哲学分野の内容として, 遊び, 運動形式, 運動文化, オリン

9) 日本体育学会『最新スポーツ科学事典』(平凡社, 2013年), 605頁。

10) 川村英男「体育学研究総説論文——体育原理の諸問題——」(体育学研究, 19(2), 1974年), 72頁。

11) 佐藤臣彦「体育学における哲学的研究の課題と二十一世紀への展望」(体育学研究, 45, 2000年), 438-439頁。

12) 前掲書, 441頁。

13) 佐藤臣彦「身体論序説: アリストテレスを中心に」(筑波大学博士論文, 1999年), 5頁。

14) 前掲書, 佐藤臣彦(体育学研究, 2000年), 436頁。

15) 前掲書, 日本体育学会(平凡社, 2013年), 604頁。

16) 前川峯雄『体育原理』(大修館書店, 1970年), 3-7頁。

ピズム, コーチング, 三育思想, 自然体育, 心身関係論, 身体, 身体運動, 身体教育, 身体知, 身体文化, スポーツ, スポーツ運動, スポーツ映像論, スポーツ学, スポーツ記号論, スポーツ技術, スポーツゲーム, スポーツ哲学, スポーツ美学, スポーツ文化, スポーツ文学, スポーツ理論, スポーツ倫理学, 専門体育, 体育, 体育学, 体育原理, 普通体育など, 具体的なカテゴリーを挙げている<sup>17)</sup>。また, 友添 (2016) は, 「スポーツや体育の現実を直視し, スポーツや体育の世界を支配する様々な諸原理 (諸原則) を明確にし, それらを体系立て, 批判的に検討しなければならない<sup>18)</sup>」と述べうえ, 具体的に「体罰や暴力, ハラスメント行為, 勝利至上主義, 体育授業や運動部活動による死亡や重度の障害事故など, スポーツや学校体育に渦巻く諸問題を直視し, 批判的に検討していかなければならない<sup>19)</sup>」と指摘している。つまり, 体育哲学の研究領域および使命は, 体育・スポーツの諸事象の根本や本質を究明するだけでなく, 体育・スポーツにおける現実問題を直視し, 哲学的方法論を用いて批判的に解答していくことである。一方, 浅井 (1963) は, 体育と哲学の関係とその注意点について, 「原理や哲学が偏向すれば, 問題は片寄ってとりあげられ, 事実は歪曲して理解されることになるし, 原理が方法論的範囲にのみ限定してとりあつかわれている間は, 体育は手段の位置に甘んじなければならぬし, それを敢えてしているかぎり人間の本质から体育それ自体が存在しなければならない理由を見失ってしまうことになる」と指摘している。

## 2. 本稿の目的および方法

### 2.1 研究目的

体育哲学の学問としての固難性を克服する解決策の一つは方法論の明確化である。体育・スポーツにおける諸事象に対する現状批判・現状分析は, 検証可能な哲学的方法論に基づいてこそ, その本質を根本原則から理論的に理論化することが可能になる。そこで, 本稿では, 過去のさまざまな体育哲学の研究領域とその方法論を明らかにすることが目的である。過去の研究領域とその方法論を検討することは, 体育哲学を賦活するための不可欠の作業であり, これをとおして, 体育哲学が求めている新たな方向性への示唆が得られると考えられる。

### 2.2 研究方法

近年国立情報学研究所の学術論文コンテンツサービス CiNii Article (以下, CiNii Article)

17) 前掲書, 日本体育学会 (平凡社, 2013年), 4 頁。

18) 友添秀則, 岡出美則編著『教養としての体育原理——現代の体育・スポーツを考えるために』(大修館書店, 2016年), 5 頁。

19) 前掲書, 3-7 頁。

を活用した計量書誌学的分析およびテキストマイニング分析が注目されている<sup>20)</sup>。CiNii Articleとは、「学協会刊行物，大学研究紀要，国立国会図書館の雑誌記事索引データベースなど，学術論文情報を検索の対象とする論文データベース・サービス」<sup>21)</sup>である。本稿は，CiNii Articleを活用した文献研究を用いた。次のような手順に沿って考察を展開する。まず，「CiNii Article」において「体育哲学」をキーワードとして論文を検索し，論文の種類（学会論文，学会発表予稿集，紀要など）を整理する。次に，学会論文・紀要（学会発表予稿集を除く）を対象に，クロニック方式を採用し，研究の内容・領域とその方法論を考察する。最後に，以上の検討をとおして，体育哲学の潮流と新たな方向性を提案したい。

### 2.3 先行研究の検討

日本体育学会（2013）<sup>22)</sup>は，体育哲学の研究課題を大きく二つに分けている。それは，①体育の概念を論理的に構成する体育原理，②体育の理論的・実践的現状を批判的に分析する体育批判の二つである。すなわち，体育哲学は，体育とは何か，身体とは何かなど，体育における諸本質問題を究明する領域（原理論）と，体育・スポーツ界における諸事象・現状（不祥事問題を含む）を批判的に究明する領域（現状批判）に分けることができる。一方，游（2018）<sup>23)</sup>は，世界の体育・スポーツ哲学の研究領域について，①倫理と価値判断を中心とする倫理学，②研究方法論，③身体や真理について模索することを目的とした形而上学（存在論）など，3つの研究領域を挙げており，方法論は体育哲学の主な研究領域の一つである。また，游は，台湾におけるスポーツ哲学研究の発展史を述べながら，①1976年以前の体育原理の時代，②1976年から1987年までの体育哲学の時代，③1988年から現在までのスポーツ哲学の時代など，3つの時代に分けている<sup>24)</sup>。一方，高田（2007）<sup>25)</sup>は，日本における体育哲学の学的形成のプロセスとその特徴を次のように整理している。①1960年前後に川村英男や石津誠が彼らの著書の中で体育の哲学的考察を行い，事実上はじめて体育哲学を論じた。②1970年代は，阿部忍が『体育哲学』を著し，戦後はじめて体育哲学の体系化を試みた。③1970年代から1980年代にかけては，吉澤宗吉，篠田基行，阿部忍，飯塚鉄雄，片岡暁夫らによっ

20) たとえば，伊藤央二「国内スポーツツーリズム研究の系統的レビュー」（体育学研究，62(2)，2017年），773-787頁。山口志郎・押見大地・福原崇之「スポーツイベントが開催地域にもたらす効果：先行研究の検討」（体育学研究，63(1)，2018年），13-32頁などがある。

21) [https://support.nii.ac.jp/ja/cia/cinii\\_articles](https://support.nii.ac.jp/ja/cia/cinii_articles)（2018年10月24日付）

22) 前掲書，日本体育学会（平凡社，2013年），568頁。

23) 游添燈「台湾におけるスポーツ哲学研究の潮流」（体育・スポーツ哲学研究，40(1)，2018年），14頁。

24) 前掲書，15頁。

25) 高田哲史「日本における体育哲学の学的形成に関する研究——1920年代の數川與五郎の体育哲学を中心に——」（広島大学大学院教育学研究科紀要，第一部，第56号，2007年），59-60頁。

て海外の著書の翻訳や海外の哲学的考察が紹介され、体育哲学やスポーツ哲学の論議が行われた。④1990年代は、樋口聡、瀧澤文雄、関根正美らによる哲学的研究が活発に行われ、体育原理から体育哲学へと名称変更する基盤ができた。なかでも佐藤臣彦は体育哲学の名称変更により多大な功績を残したと述べている。また、佐々木ほか(2013)<sup>26)</sup>や田井ほか(2015)<sup>27)</sup>は、体育・スポーツの原理論の先行研究を言及しながら、体育哲学における原理論は前川峯雄、川村英勇、木下秀明、佐藤臣彦、大橋道雄などの体育学者らによって提案され、近年では、新しい議論の提案をみることはあまりないと述べている。そして、釜崎(2013)<sup>28)</sup>は、日本における体育哲学の変遷を次のように整理している。①日本における体育哲学の学的萌芽は、1920年代の数川與五郎から1930年代の可兒徳らの研究に遡る。②前川峯雄は、専門領域としての体育の独自性に着目し、戦後体育制度の確立と体育哲学の科学化の萌芽期を開いた。③丹下保夫は、体育哲学の発展に貢献した。身体を取り込む社会運動およびイデオロギー的な特性に着目し、運動文化論を構築させた。④佐藤臣彦は、身体教育に着目し、体育哲学を完熟させた。⑤樋口聡は、ポスト構造主義がいう反省的实践に着目し、教科の区画に捉われることなく実践される身体教育を提案している。上記のことより、日本における体育哲学の変遷にはクロニック的特徴があり、また、体育哲学の研究は一部の体育学者らによって形成されてきたことがうかがえる。

本稿は、体育哲学とは何かを問うため、その方法論に着目している。では、方法論とは何か。高橋(2002)は、方法論について、「具体的な作業の手順よりも、それぞれの個別科学が根本的にもっているさまざまな方法論的な特性を反省してみるという意味が強く、方法についての反省というメタレベルでの科学方法論の分野がむしろ重要とみなされる」<sup>29)</sup>と述べている。また、高橋は、方法論を概論しながら、「合理的な方法論」と「非合理的な方法論」に分けている。高橋の概論を要約すると以下のとおりである<sup>30)</sup>。まず、「合理的な方法論」としては、①アリストテレス以来の演繹的方法、②ベーコンの帰納法、③デカルトやスピノザなどによる確実で疑いえない形而上学的原理論、④ライプニッツの普遍記号学、⑤カントの観念論、⑥ヘーゲルの絶対的観念論、⑦コントの実証主義、⑧ディルタイの解釈学、⑨フッサールの現象学、⑩ウェーバーの社会科学方法論、⑪フランクフルト学派の批判的・二元論など、さまざまあるが、今日いずれも決定的な方向づけがなされるまでにはいたっていない、

26) 佐々木究・田井健太郎「体育原理論の批判的検討——佐藤臣彦『身体教育を哲学する』に着目して——」(体育・スポーツ哲学研究, 35(1), 2013年), 22頁。

27) 田井健太郎・阿部悟郎・金崎太・佐々木究「体育哲学を再考する(1年目)——『体育原理論』のこれまでとこれから——」(体育・スポーツ哲学研究, 35(1), 2013年), 51頁。

28) 前掲書, 56頁。

29) 高橋容一郎「事典 哲学の木」(講談社, 2002年), 867-869頁。

30) 前掲書, 867-869頁。

としている。次に、「非合理的な方法論」について、神秘主義思想、宗教、芸術の分野で感覚的な知、瞑想、修行、脱自体験、啓示や覚醒、悟りなど、体験的基盤による実証を究明する方法として用いられる、としている。体育哲学においても体育・スポーツの諸事象を究明するため、さまざまな哲学的方法論に着目した研究が多くみられる。たとえば、佐藤（1999）は、体育をめぐる実践知と理論知の問題<sup>31)</sup> および身体論<sup>32)</sup> を究明するため、アリストテレスの哲学に着目している。また、佐藤（2006）<sup>33)</sup> は、同じ実践知と理論知の問題を究明するため、アリストテレスの哲学を言及しつつ、理論実証主義哲学の中心的人物であったカルナップや科学哲学者ポパーに着目している。また、坂本（2012）<sup>34)</sup> は、体育教師の身体論を批判的に究明する方法として、メルロ＝ポンティの現象学に着目している。また、林（2013）<sup>35)</sup> は、体育原理から体育哲学へと名称変更したことを踏まえ、デカルト哲学に着目して、体育原理と体育哲学との概念的差異について考察している。このように、体育哲学は、西洋哲学の「合理的な方法論」に基づいた研究が主流である。

また、体育哲学の変遷を再考した研究としては、田井ほか（2013）<sup>36)</sup> の「体育哲学を再考する（1年目）—体育原理論のこれまでとこれから—」、田井ほか（2014）<sup>37)</sup> の「体育哲学を再考する（2年目）—体育原理論の応用可能性—」、田井ほか（2015）<sup>38)</sup> の「体育哲学を再考する（3年目）—新たな議論の可能性の探求—」がある。これらは、日本体育・スポーツ哲学会の3カ年計画シンポジウムの結果を報告したもので、①体育原理論の現状分析、②体育原理論の応用可能性の検証、③新たな議論の可能性の探求、という課題を設定し、体育原理論の全般を再考している<sup>39)</sup>。一方、体育哲学における方法論の変遷とそのクロニック的特徴に着目した研究は、散見の限りみられない。

31) 佐藤臣彦「体育学の対象と学的基礎」(体育学研究, 44, 1999年), 483-492頁。

32) 佐藤臣彦「身体論序説：アリストテレスを中心に」(筑波大学博士学位論文, 1999年), 1-304頁。

33) 佐藤臣彦「体育哲学の課題」(体育・スポーツ哲学研究, 28(1), 2006年), 1-10頁。

34) 坂本拓弥「体育教師論の批判的検討——体育教師の身体論に向けて——」(体育・スポーツ哲学研究, 34(1), 2012年), 23-36頁。

35) 林洋輔「〈原理〉から〈哲学〉へ：〈生き方としての体育哲学〉に向けた序論」(The Annual Reports of Health, Physical Education and Sport Science, Vol. 32, 2013年), 39-51頁。

36) 田井健太郎・阿部悟郎・釜崎太・佐々木究「体育哲学を再考する（1年目）——体育原理論のこれまでとこれから——」(体育・スポーツ哲学研究, 35(1), 2013年) 51-59頁。

37) 田井健太郎・佐々木究・近藤智晴・中澤篤史・中嶋哲也「体育哲学を再考する（2年目）——体育原理論の応用可能性——」(体育・スポーツ哲学研究, 36(1), 2014年) 45-54頁。

38) 田井健太郎・佐々木究・杉山英人・高橋徹・高橋浩二「体育哲学を再考する（3年目）——新たな議論の可能性の探求——」(体育・スポーツ哲学研究, 37(1), 2015年) 69-78頁。

39) 前掲書, 田井健太郎・阿部悟郎・釜崎太・佐々木究 (体育・スポーツ哲学研究, 2013年), 52頁。

### 3. 結果および考察

本稿は、日本における体育哲学の方法論の変遷とそのクロニック的特徴を究明するため、CiNii Article を活用した文献研究を用いた。まず、CiNii Article において「体育哲学」をキーワードとして論文を検索した。その結果、446論文が検索された。論文の内訳は、表1のとおりである。内訳は学会論文176件(39.4%)、紀要論文8件(1.8%)、学会予稿集262件(58.8%)であった。また、論文の発行年度は1958年から2018年までであった。考察に当たっては、学会予稿集を除いた学会論文(176件)と紀要論文(8件)を対象とした。高田(2007)は、日本における体育哲学の学的形成と時期を、①1960年前後、②1970年代から1980年代、③1990年代に分けている。また、体育哲学は、2005年6月の日本体育学会総会において、「体育原理専門分科会」から「体育哲学専門分科会」へと名称変更されている。この名称変更は、「体育学における哲学的研究にとって大きな意味を持つことになる新たな一歩であった」<sup>40)</sup>と評価される。つまり、2005年は体育哲学の一つの区切りとして考えることができる。そこで、本稿では、高田の時代区分を参考に、①1960年前後、②1970年代から1980年代、③1990年代から2005年、④2006年から現在までに分けて考察を進めた。

#### 3.1 1960年前後：戦後体育哲学の成立期

CiNii Article において「体育哲学」をキーワードとして論文を検索した。そして、戦後から1960年代までの論文を整理した。その結果、6件の学会論文があった。結果をもとに年代、著者、発行機関(年度)、内容および領域、方法論を整理した。その結果は、表1のとおりである。

この時期、「体育哲学」をキーワードとした論文は、1958年下津屋の論文からみられた。発行機関は、体育学研究4件、体力科学1件、武道学研究1件で、著者(論文数)は、下津屋

表1 体育哲学の内容・領域および方法論(1958年～1968年)

年代	著者	発行機関(年度)	内容および領域	方法論
1960年前後	下津屋俊夫	体育学研究(1958)	形而上学的課題	アリストテレス
	阿部忍	体育学研究(1963)	体育哲学の成立史	史学、批判
	三橋喜久雄	体力科学(1965)	原理	原理論
	阿部忍	体育学研究(1966)	方法	弁証法
	阿部忍	体育学研究(1968)	心身相関	デカルト
	吉沢宗吉	武道学研究(1968)	武道哲学分析	観念論、自然主義、实在論 プラグマチズム

40) 前掲書、佐藤臣彦(体育・スポーツ哲学研究、2006年)、2頁。



(1), 阿部 (3), 三橋 (1) であった。内容は, 形而上学 (存在論, 哲学), 成立史 (歴史), 原理 (原理論), 方法 (方法論), 心身論 (哲学), 武道 (武道哲学) などであった。また, 方法論としては, アリストテレス哲学, 弁証法, デカルト哲学, 観念論, 自然主義, 存在論, プラグマチズム (pragmatism) など, 主に西洋哲学の「合理的な方法論」<sup>41)</sup> が用いられていた。佐藤 (2000) は, 戦後, 体育学の成立期の特徴について, 「解決されるべき理論上の問題がまず存在し, 必要に迫られて構築されてきたというよりも, 教育機関に所属している体育教師が, とにかく自分たちの研究発表の場を確保しようということから出立した」<sup>42)</sup> と述べている。この時期は, 方法論として主に西洋哲学の「合理的な方法論」を用いているものの, 方法論を用いた具体的な究明はみられなかった。また, 日本の武道を西洋の合理的な方法論から究明しようとする試みもみられた。1960年前後は, 体育哲学の成立期的特徴がみられた。

### 3.2 1970年代から1980年代：体育哲学の体系化期

CiNii Article において「体育哲学」をキーワードとして論文を検索した。そして, 1970年から1990年までの論文を整理した。その結果, 4件の学会論文があった。結果をもとに年代, 著者, 発行機関 (年度), 内容および領域, 方法論を整理した。その結果は, 表2のとおりである。

この時期, 「体育哲学」をキーワードとした論文は, 1974年川村の論文からみられた。また, 発行機関は, 体育学研究1件, 国士舘大学体育学部紀要1件, 体育・スポーツ哲学研究1件, 体育の科学1件で, 著者 (論文数) は, 川村 (1), 下津屋 (1), 佐藤 (1), 片岡 (1) であった。内容としては, 体育原理 (原理論), 心身論 (哲学), 方法 (方法論), 授業論 (現状批判) などがあった。また, 方法論 (件数) としては, 批判 (2), デカルト哲学 (1), レヴィ=ストロース哲学 (1) など, 主に西洋哲学の「合理的な方法論」が用いられていた。佐々木ほか (2013)<sup>43)</sup> や田井ほか (2015)<sup>44)</sup> によれば, 日本における体育とスポーツの定義

表2 体育哲学の内容・領域および方法論 (1974年～1985年)

年代	著者	発行機関 (年度)	内容・領域	方法論
1970～1990	川村英男	体育学研究 (1974)	体育原理とは	批判
	下津屋俊夫	国士舘大学体育学部紀要 (1975)	心身論	デカルト
	佐藤臣彦	体育・スポーツ哲学研究 (1985)	体育原理, 方法	レヴィ=ストロース
	片岡暁夫	体育の科学 (1985)	授業論	批判

41) 前掲書, 高橋容一郎 (講談社, 2002年), 867-869頁。高橋は, 方法論を「合理的な方法論」と「非合理的な方法論」の二つに分けている。

42) 前掲書, 佐藤臣彦 (体育学研究, 2000年), 438頁。

43) 前掲書, 佐々木究・田井健太郎 (体育・スポーツ哲学研究, 35(1), 2013年), 22頁。

44) 前掲書, 田井健太郎・阿部悟郎・釜崎 太・佐々木究 (体育・スポーツ哲学研究, 35(1), 2013年) 51頁。

は、前川峯雄、川村英勇、木下秀明、佐藤臣彦、大橋道雄などの体育学者らによって提案されたものである。この時期から、川村や佐藤による体育とは何かという原理論に着目した研究がみられた。川村は、体育原理、体育哲学とは何かという原理論を批判的に考察していた。ここで批判 (critique) とは、感情的、情緒的な反応である非難とは異なり、対象を分析することで見過ごされてきた問題点や矛盾点を明確化する知的な営みであり<sup>45)</sup>、現状問題の真偽や善悪に対する評価や吟味、あるいは本質的事象へ導くための哲学的批判である<sup>46)</sup>。また、佐藤は、フランスの人類学者レヴィ＝ストロース (Lévi-Strauss) に着目して、体育とは何かを究明しようと試みていた。佐藤は、レヴィ＝ストロース哲学について、「表層から深層への構造論的接近法は、僕の研究方略の根幹をますもの」<sup>47)</sup>と、述べている。また、下津屋の研究は、アリストテレス哲学からデカルト哲学へと方法論が変わっていた。また、体育授業について批判的に考察したものもみられた。この時期は、デカルト哲学、レヴィ＝ストロース哲学などの西洋哲学を用いたより具体的な究明への試みがみられた。

### 3.3 1990年代から2005年：体育哲学の発展期

CiNii Article において「体育哲学」をキーワードとして論文を検索した。そして、1990年から2005年までの論文を整理した。その結果、21件の論文 (学会論文20, 紀要1) があった。結果をもとに、年代、著者、発行機関 (年度)、内容および領域、方法論を整理した。その結果は、表3のとおりである。

この時期、体育哲学をキーワードとした論文は、1991年佐藤の論文からみられた。また、発行期間は、体育哲学研究16件、体育・スポーツ哲学研究3件、身体運動文化研究1件、福岡大学スポーツ科学研究1件で、著者 (論文数) は、舛本 (4)、佐藤 (2)、山下 (2)、石川 (1)、久保 (1)、高松 (1)、新保 (1)、阿部 (1)、釜崎 (1)、高田 (1)、深澤 (1)、山口 (1)、加藤 (1)、高橋 (1)、吉田 (1)、木村 (1) など、1970年代から1980年代までに比べて増えていた。内容 (件数) としては、身体論 (4)、オリンピック諸問題 (3)、方法論の文献案内および論文の書き方 (2)、体育原理の変遷 (1)、人間形成論 (3)、運動技術 (1)、体育哲学の類型化 (1)、自然科学的知識 (1)、コミュニケーション論 (1)、教員養成論 (1)、スポーツ経営学科の取り組み (1)、不安要因 (1)、大学と地域の連携 (1) など、多様化していた。また、方法論としては、批判 (16)、デカルト哲学 (1)、プラグマティズム哲学 (1)、Spranger E の実存哲学 (1) など、主に西洋哲学の「合理的な方法論」が用いられていた。一方、西田

45) 前掲書、日本体育学会 (平凡社、2013年)、604頁。

46) 新村 出編「広辞苑 第六版」(岩波書店、2008年)、2381頁。

47) 佐藤臣彦「体育哲学・スポーツ哲学へのプロトレプティコス——哲学的思索とその表現のための文献案内」(体育・スポーツ哲学研究、13(2)、1991年)、110頁。

表3 体育哲学の内容・領域および方法論（1990年～2005年）

年代	著者	発行機関（年度）	内容・領域	方法論
1990年～ 2005年	佐藤臣彦	体育・スポーツ哲学研究（1991）	方法論の文献案内	概論, 批判
	舛本直文	体育・スポーツ哲学研究（1992）	運動技術	批判
	山下和彦	体育・スポーツ哲学研究（1993）	体育哲学の類型化	比較, 批判
	佐藤臣彦	身体運動文化研究（1998）	身体論	デカルト哲学
	山下和彦	福岡大学スポーツ科学研究（2001）	類型化	プラグマティズム
	舛本直文	体育原理研究（2002）	オリンピック問題, flag 入場	批判
	舛本直文	体育原理研究（2002）	オリンピック, 文化プログラム	批判
	舛本直文	体育原理研究（2004）	オリンピック, 聖火リレー	批判
	石川旦	体育哲学研究（2005）	体育原理の回顧・展望	批判
	久保正秋	体育哲学研究（2005）	人間形成論, 形成と生成	批判
	高松昌宏	体育哲学研究（2005）	身体論	西田哲学
	新保淳	体育哲学研究（2005）	科学的知識の生産様式	批判
	阿部悟郎	体育哲学研究（2005）	人間学的論議	実存哲学, Spranger, E.
	釜崎太井	体育哲学研究（2005）	身体教育論, 協同学習	批判
	高田哲史	体育哲学研究（2005）	身体論	和辻の論理学
	深澤造洋ほか	体育哲学研究（2005）	コミュニケーション	批判
	山口順子ほか	体育哲学研究（2005）	論文の書き方, 投稿の基礎	批判
	加藤敏弘	体育哲学研究（2005）	教員養成カリキュラム	批判, 報告
	高橋正紀	体育哲学研究（2005）	スポーツ経営学科の取り組み	批判, 報告
吉田正ほか	体育哲学研究（2005）	指導場面での不安要因	批判, 報告	
木村真知子ほか	体育哲学研究（2005）	大学と地域の連携	批判, 報告	

(1) や和辻 (1) など、日本の学者の哲学や倫理学を方法論として採択した研究もみられた。また、この時期からは、山口順子、木村真知子など、女性研究者の登場もみられた。また、佐藤や山口による研究方法論の文献案内や、論文の書き方および論文投稿の基礎が提案され、後の研究者へ影響を与えていた。この時期から、体育・スポーツ哲学研究や体育哲学研究（旧体育原理研究）への投稿論文が増えており、両学会誌は体育哲学を研究する者の登用門となっていた。また、2000年以降は、オリンピック諸問題、スポーツ経営学科の取り組み、大学と地域の連携など、体育・スポーツをめぐる現実問題が課題として浮かび上がりはじめていた。つまり、この時期は、体育の概念を論理的に構成する体育原理的内容だけではなく、体育の理論的・実践的現状を批判的に分析する現状批判的内容も増えていた。

### 3.4 2006年から現在まで：体育哲学の定着期および研究領域の多様化期

CiNii Article において「体育哲学」をキーワードとして論文を検索した。そして、2006年から現在年までの論文を整理した。その結果、153件の論文（学会論文146、大学紀要7）があった。結果をもとに、年代、著者、発行機関（年度）、内容および領域、方法論を整理した。その結果は、紙面上表4と表5に分けて示した。

この時期、体育哲学をキーワードとした論文は、2006年20件、2007年20件、2008年14件、

表 4 体育哲学の内容・領域および方法論 (2006年～2009年)

年代	著者	発行機関 (年度)	内容・領域	方法論
2006年～ 2009年	クラウスロート・木村真知子訳	体育哲学研究 (2006)	大学と地域の連携 (ドイツ)	翻訳, 批判, 報告
	佐藤臣彦	体育・スポーツ哲学研究 (2006)	体育哲学の課題	批判
	遠藤卓郎ほか	体育・スポーツ哲学研究 (2006)	生とからだと体育	批判
	新保淳	体育哲学研究 (2006)	体育教員養成, 専門性	批判
	久保正秋	体育哲学研究 (2006)	身体教育と遊び	批判
	釜崎太	体育哲学研究 (2006)	学校体育の可能性と課題	佐藤学, 批判
	阿部悟郎	体育哲学研究 (2006)	身体運動文化	Spranger, E. の文学哲学
	関根正美	体育哲学研究 (2006)	行為と身体経験	批判
	高田哲史	体育哲学研究 (2006)	体育学への影響	辻井哲郎・前川峯雄体育学
	石垣健二ほか	体育哲学研究 (2006)	体育における他者	批判
	田井健太郎	体育哲学研究 (2006)	甲州流兵法, 倫理学	『甲陽軍艦』, 批判
	田中愛	体育哲学研究 (2006)	他者とのかわり	批判
	佐藤臣彦	体育哲学研究 (2006)	体育哲学研究の独自性	批判
	大庭康樹	体育哲学研究 (2006)	身体論	プラトン哲学
	関根正美	体育哲学研究 (2006)	英文誌への論文投稿	批判
	杉山英人	体育哲学研究 (2006)	体育教員養成	批判
	佐藤臣彦	体育哲学研究 (2006)	身体教育の独自性	批判
	森田啓之	体育哲学研究 (2006)	体育教員養成の理念と原理	批判
	阿部悟郎ほか	体育哲学研究 (2006)	人間形成概念と方向性	批判
	滝沢健武	体育哲学研究 (2006)	体操競技の現状分析	批判
	桜井佳樹	香川大学教育実践総合研究 (2007)	自己・他者理解, 人間形成論	批判
	高田哲史	広島大学教育学研究科紀要 (2007)	体育哲学の学的形成	数川與五郎, 批判
	高橋和子ほか	体育・スポーツ哲学研究 (2007)	からだ気づき, 身体論	批判
	大庭康樹	体育哲学研究 (2007)	身体の状態	批判
	新保淳	体育哲学研究 (2007)	スポーツ科学論	科学論, 批判
	阿部悟郎	体育哲学研究 (2007)	教育学的視野	Spranger, E. の教育学
	高田哲史	体育哲学研究 (2007)	体育哲学の学的形成	批判
	田井健太郎	体育哲学研究 (2007)	北条氏長の兵法思想	『土鑑用法』, 批判
	山本泰士	体育哲学研究 (2007)	他者, 驚き	批判
	高橋浩二	体育哲学研究 (2007)	体育の扱うべきまなざし	先行研究概観, 批判
	三浦裕	体育哲学研究 (2007)	札幌冬季オリンピック招致	批判
	近藤良亨	体育哲学研究 (2007)	1998年長野五輪の招致	批判
	大庭康樹	体育哲学研究 (2007)	身体論の淵源	プラトン哲学
	山口一郎	体育哲学研究 (2007)	身体論, 多元的アプローチ	批判
	樋口聡	体育哲学研究 (2007)	身体論, 西洋と東洋の相克	批判
	杉山英人	体育哲学研究 (2007)	身体教育論, 身体と動き	自然科学, 批判
	下永田修二	体育哲学研究 (2007)	身体と動き	自然科学, 批判
	小宮山伴与志	体育哲学研究 (2007)	反射機構からみた身体と育成	自然科学, 批判
	滝沢文雄	体育哲学研究 (2007)	身体教育	批判
	Gebauer Gunter・樋口聡訳	体育哲学研究 (2007)	英雄主義	ニーチェ, フーコー
	久保正秋ほか	体育・スポーツ哲学研究 (2008)	病いと老いと死, 生とからだ	批判
	久保正秋ほか	体育・スポーツ哲学研究 (2008)	病いと老いと死, 生とからだ	批判
久保正秋	体育哲学研究 (2008)	人間形成	批判	
新保淳	体育哲学研究 (2008)	身体論, 自然性	批判	
日野晃希	体育哲学研究 (2008)	体育論	批判	
Ballexserd Jacques	体育哲学研究 (2008)	子どもの身体教育, 誕生から思春期	批判	
佐々木究・樋口聡訳	体育哲学研究 (2008)	身体論の多層的展開	批判	
小松恵一	体育哲学研究 (2008)	知覚と身体運動	批判	
杉山英人	体育哲学研究 (2008)	身体の文化性	批判	
小林日出至郎	体育哲学研究 (2008)	学力と新学習指導要領との関係	批判	
岡出美則	体育哲学研究 (2008)	学力と新学習指導要領との関係	批判	
阿部悟郎	体育哲学研究 (2008)	人間形成と新学習指導要領との関係	批判	
岩田靖	体育哲学研究 (2008)	授業実践	批判	
浅田隆夫	体育の科学 (2008)	継ぐことと関わること	批判	
久保正秋	体育哲学研究 (2009)	人間形成論, 指導者と子ども関係性	批判	
大庭康樹	体育哲学研究 (2009)	身体論とコーラー	プラトン哲学	
田寺泰久	体育哲学研究 (2009)	高野連の不祥事問題	批判	
阿部悟郎	体育哲学研究 (2009)	方法論, 精神科学的教育論の可能性	精神科学論, 批判	
石垣健二	体育哲学研究 (2009)	関主観性と関身体性	鮎園峻の議論, 批判	
阿部悟郎ほか	体育哲学研究 (2009)	学校体育論の逆照射	批判	
平井章	体育哲学研究 (2009)	戦後運動観の変遷と体力論議	批判	
久保健	体育哲学研究 (2009)	運動文化論, 主体者形成, 生活世界	批判	
長見真	体育哲学研究 (2009)	プレイとしての運動学習の意味	批判	
滝沢文雄	体育哲学研究 (2009)	身体教育論	批判	
樋口聡ほか	体育哲学研究 (2009)	広島と身体文化, ローカリティ	批判	
舩本直文	体育哲学研究 (2009)	広島のグローバルなスポーツ文化	批判	
釜崎太	体育哲学研究 (2009)	広島の近代体育の形成と展開	批判	
桑島秀樹	体育哲学研究 (2009)	広島と喪のアート, 演劇的身ぶり	批判	
Turner David・樋口聡訳	体育哲学研究 (2009)	教育学とスポーツ哲学	批判	

金：体育哲学原理とは何か

表5 体育哲学の内容・領域および方法論（2010年～2018年）

年代	著者	発行機関（年度）	内容・領域	方法論
2010年～ 2018年	阿部悟郎	体育哲学研究 (2010)	思想的起点、越克	ディルタイ哲学
	舛本直文	体育哲学研究 (2010)	オリンピック競技大会、平和運動	批判
	深澤浩洋	体育哲学研究 (2010)	肉概念、生成体験	批判
	大橋道雄ほか	体育哲学研究 (2010)	学校体育論議の起点	批判
	阿部悟郎	体育哲学研究 (2010)	学校体育論議の起点	批判
	佐々木亮	体育哲学研究 (2010)	学校体育論議の起点	ルソー哲学
	森田啓之	体育哲学研究 (2010)	学校体育論議の起点	デュエイ、プラグマティズム
	関根正美	体育哲学研究 (2010)	学校体育論議の起点	ヤスパース哲学
	久保正秋	体育哲学研究 (2010)	学校体育論議の起点、体育哲学	批判
	田中愛ほか	体育哲学研究 (2010)	質的研究方法	批判
	田中愛	体育哲学研究 (2010)	質的研究方法	現象学
	渡辺英児	体育哲学研究 (2010)	質的研究方法、スポーツ心理学から	心理学
	上原三十三	体育哲学研究 (2010)	質的研究方法	モルフォロジー（運動形態学）
	近藤良享	体育哲学研究 (2010)	ドーピング問題	批判
	高岡英気	体育哲学研究 (2011)	プロスポーツ球団の経済活動	批判
	阿部悟郎	体育哲学研究 (2011)	体育本質論	ジンメル
	大橋奈希左	体育哲学研究 (2011)	ダンス作品、踊ることの意義	批判
	藤澤良彦	体育哲学研究 (2011)	体育の価値体験	シュランガー精神科学
	藤澤良彦	体育哲学研究 (2011)	陶冶価値	シュランガー教育学
	坂本拓弥	体育哲学研究 (2011)	身体論、運動部活動	批判
	河野清司	体育哲学研究 (2011)	スポーツと健康	批判
	高根信吾	体育哲学研究 (2011)	質的研究方法、ビデオ共有システム	批判
	石垣健二	体育哲学研究 (2011)	問身体性・問主観性	批判
	阿部一麻	体育哲学研究 (2011)	スポーツマンシップとフェアネスの関係	批判
	深澤浩洋ほか	体育哲学研究 (2011)	体育における評価	批判
	友添秀則	体育哲学研究 (2011)	人間形成論	批判
	釜崎太	スポーツ教育学研究 (2012)	教科書	久保正秋著書、批判
	石垣健二	体育科教育学研究 (2012)	体育授業	現象学
	林洋輔ほか	国士館大学教育研究所報 (2012)	心身関係論、思想	デカルト哲学
	林洋輔	体育哲学研究 (2012)	身体論	デカルト哲学
	高橋徹	体育哲学研究 (2012)	体育理論	プラグマティズム
	阿部悟郎	体育哲学研究 (2012)	人間学	ジンメルの生の哲学
	舛本直文	体育哲学研究 (2012)	YOGの方向性、IWYOG参加報告	批判、報告
	藤澤良彦	体育哲学研究 (2012)	教育学的可能性	シュランガー文化教育学
	藤澤良彦	体育哲学研究 (2012)	覚醒形成の教育的可能性	シュランガー覚醒理論
	藤澤良彦ほか	体育哲学研究 (2012)	体育評価	批判
	釜崎太ほか	体育哲学研究 (2012)	身体知、身体教育の可能性	批判
	林洋輔	身体運動文化研究 (2012)	身体の二面性	デカルト哲学
	林洋輔ほか	国士館大学体育研究所報 (2013)	心身関係論、思想	デカルト哲学
	田井健太郎ほか	体育・スポーツ哲学研究 (2013)	体育原理論の変遷と展望	批判
	林洋輔	国士館大学体育研究所報 (2013)	生き方としての体育哲学	批判
	阿部悟郎	体育哲学研究 (2013)	人間学の基底	ジンメルの生の哲学
	久保正秋	体育哲学研究 (2013)	人間形成、時間性的問題	批判
	神野周太郎	体育哲学研究 (2013)	経験概念	デュエイ、プラグマティズム
	石垣健二	体育哲学研究 (2013)	自己と他者のかかわり	メルロ＝ポンティ
	舛本直文	体育哲学研究 (2013)	オリンピック大会、体職活動	批判
	河野清司	体育哲学研究 (2013)	オフサイド、シンボル形式	批判
	田井健太郎ほか	体育哲学研究 (2013)	スポーツ実践の現在	批判
	井上誠治	体育哲学研究 (2013)	ヒューマニスティック体育論の系譜	批判
	林洋輔	体育哲学研究 (2013)	心身合一論	デカルト哲学
鄧向東	体育哲学研究 (2013)	中国の近代教育思想、体育カリキュラム	批判	
阿部悟郎	体育哲学研究 (2014)	人格主義	ジンメルの生の哲学	
佐々木亮	体育・スポーツ哲学研究 (2014)	友添秀則・佐藤臣彦著書への批判	批判	
大橋奈希左	体育哲学研究 (2014)	ダンス、模倣	批判	
神野周太郎	体育哲学研究 (2014)	学校体育、民主主義的方向	デュエイ、プラグマティズム	
田井健太郎ほか	体育哲学研究 (2014)	パフォーマンス	批判	
大津克哉ほか	体育哲学研究 (2014)	オリンピック・レガシー	批判	
岡部祐介	体育哲学研究 (2014)	1960年代根性論	批判	
小林日出一郎	体育哲学研究 (2015)	神々と英雄たちの関係性	批判	
阿部悟郎	体育哲学研究 (2015)	人格主義	ホメロスのイリアス、批判	
森田啓之ほか	体育哲学研究 (2015)	文化論	ニーチェ、ジンメル	
大橋奈希左ほか	体育哲学研究 (2015)	ダンス、体育学の視点	批判	
深澤浩洋	体育哲学研究 (2016)	コーチング論、モデル・コア・カリキュラム	批判	
阿部悟郎	体育哲学研究 (2016)	教育学的人間理解	ディースターヴエーク教育学	
高田哲史	体育哲学研究 (2016)	大西要の『教育的体育学』（1926）	大西要、批判	
大橋奈希左ほか	体育哲学研究 (2016)	表現運動、ダンス、からだ	批判	
石垣健二	体育哲学研究 (2016)	問身体性・問主観性	批判	
白川聡美	体育哲学研究 (2016)	震災被災地芸術家派遣事業の課題	批判	
森田啓之ほか	体育哲学研究 (2016)	生涯スポーツ	批判	
荒牧亜衣	体育哲学研究 (2016)	オリンピック・レガシー	批判	
文教大学教育学部紀要	(2016)	体育教員養成、授業内容の日台比較	批判	
田中愛	体育・スポーツ哲学研究 (2016)	アダプテッド・スポーツ、身体	現象学	
野上玲子	体育・スポーツ哲学研究 (2016)	オリンピズムの平和思想	カント哲学	
佐々木亮	体育・スポーツ哲学研究 (2017)	高島平三郎、体育の基盤的論理	高島平三郎、批判	
阿部悟郎	体育・スポーツ哲学研究 (2017)	体育の教育学的基底と可能性	ディースターヴエーク教育学	
神野周太郎	体育・スポーツ哲学研究 (2017)	探求概念の体育論的再解釈	デュエイ、プラグマティズム	
野上玲子	体育・スポーツ哲学研究 (2017)	オリンピックのコスモポリタン平和構想	カント哲学	
坂本拓弥	体育・スポーツ哲学研究 (2017)	ドーピング問題の欲望論的考察	批判	
佐藤雄哉ほか	体育・スポーツ哲学研究 (2017)	柔道の文化変容、柔道とJUDO	批判	
鈴木理	体育・スポーツ哲学研究 (2018)	球技の攻撃と防御の認識論的検討	認識論	
高尾高平	体育・スポーツ哲学研究 (2018)	スポーツの指導と暴力	批判	
広瀬健一ほか	体育・スポーツ哲学研究 (2018)	スポーツにおける言語論	批判	
長谷川憲	体育・スポーツ哲学研究 (2018)	自己犠牲的チームプレイ、選手の主体	サルトル	
裏芝允	体育学研究 (2018)	身体感性論	デュエイ、プラグマティズム	

2009年15件, 2010年14件, 2011年12件, 2012年12件, 2013年13件, 2014年 7 件, 2015年 4 件, 2016年11件, 2017年 6 件, 2018年 5 件などであった。また, 発行機関は, 体育哲学研究123件, 体育・スポーツ哲学研究19件, 国士舘大学体育研究所報 2 件, 体育学研究 1 件, 香川大学教育実践総合研究 1 件, 広島大学教育学研究科紀要 1 件, 体育の科学 1 件, スポーツ教育学研究 1 件, 国士舘大学教育研究所報 1 件, 身体運動文化研究 1 件, 体育科教育学研究 1 件, 文教大学教育学部紀要 1 件であった。著者(論文数)は, 阿部悟郎(15), 林(6), 石垣(5), 田井(5), 樋口(5), 藤澤(5), 佐藤臣彦(4), 大橋奈希左(4), 舛本(4), 田中(4), 佐々木(4), 高田(4), 大庭(4), 関根(3), 杉山(3), 新保(3), 神野(3), 深澤(3), 滝沢文雄(2), 森田(2), 小林(2), 坂本(2), 河野(2), 野上(2), 高橋浩二(1), 遠藤(1), 高橋和子(1), 滝沢健弐(1), 山本(1), 三浦(1), 山口(1), 大橋(1), 下永田(1), 小宮山(1), 日野(1), 小松(1), 岡出(1), 岩田(1), 平井(1), 久保健(1), 長見(1), 桑島(1), 渡辺(1), 上原(1), 近藤(1), 阿部一麻(1), 高田英気(1), 友添(1), 高根(1), 高橋徹(1), 井上(1), 邨(1), 大津(1), 岡部(1), 白川(1), 荒牧(1), 佐藤正伸(1), 佐藤雄哉(1), 鈴木(1), 高尾(1), 広瀬(1), 長谷川(1), 田中(1), 斐(1), 木村(1), クラウスロート(1), Gebauer Gunter(1), Ballexserd Jacques(1), Turner David(1) など, 1990年代から2005年までに比べ, 研究者が大幅に増えていた。また, 斐, 邨, Gebauer Gunter(訳), Ballexserd Jacques(訳), Turner David(訳) など, 外国人研究者による研究もみられた。内容(件数)としては, 身体論および身体教育論(29), 体育・学校体育・授業(22), 人格形成・陶冶論(11), オリンピック関連(9), 方法論・質的研究方法(8), スポーツ(7), 身体運動文化論(5), 体育哲学の学的形成(4), 広島スポーツのローカリズム(4), 他者とのかかわり(4), 生・死・老い(4), 身体知(4), 体育教員養成(3), 学習指導要領(3), 表現運動・ダンス(3), 問身体性・問主観性(3), 英雄論(2), 軍学論・近世兵法論(2), ドーピング問題(2), 近世兵法書(2), 英文誌への論文投稿(1), 中国の体育(1), 友添秀則・佐藤臣彦著書批判(1), 1960年代根性論(1), コーチング論(1), アダプテッド・スポーツ(1), 暴力(1), 大学と地域との連携(1), プロスポーツ球団の経済活動(1), オフサイドとシンボル(1), チームプレイ(1), 柔道の文化変容(1), パフォーマンス(1), ヒューマニスティック体育論(1), 震災被災地芸術家派遣事業の課題(1), 日台比較(1), 探求概念の体育論的再解釈(1), 球技の攻撃と防御の認識論的検討(1), 戦後運動観の変遷と体力論議(1), 教科書(1), 覚醒形成の教育の可能性(1), 大西要の『教育的體育學』(1), 高島平三郎, 体育の基盤的論理(1), 身体感性論(1) など, 1990年代から2005年までに比べ, 関心分野がさらに多様化していた。また, 方法論としては, 批判(94), デューイ・プラグマティズム哲学(6), デカルト哲学(5), ジンメル生の哲学(5), プラトン哲学(3), 自然科学(3), シュブランガー哲学(2), Spranger.E. 文学哲学および教育学(2), ニーチェ

哲学 (2), カント哲学 (1), ルソー哲学 (1), デイルタイ哲学 (1), ヤスパース哲学 (1), 現象学・メルロ＝ポンティ (1), フーコー哲学 (1), 心理学 (1), 認識論 (1), サルトル哲学 (1), モルフォロジー・運動形態学 (1), ディースターヴェーク教育学 (1), ホメロスのイリアス (1), 佐藤臣彦学 (1), 辻井哲郎・前川峰雄の体育学 (1), 鯨岡峻の論議 (1), 久保正秋の著書 (1), 大西要の著書 (1), 甲陽軍艦 (1), 土鑑用法 (1), 数川與五郎の体育学 (1), 高島平三郎 (1), 精神科学論 (1) などであった。すなわち, 西洋哲学の「合理的な方法論」をはじめ, 教育学, 心理学, 文学, 近世兵法伝書, 日本人の体育学者など, 伝統的な哲学的方法論に捉われず, 幅広い個別科学分野および個人の研究に着目した研究がみられた。また, 2006年以降は大村, 高橋, 田中, 大橋, 荒牧, 野上など, 女性研究者の活躍が目立っていた。そのうち, 田中は, 2009年度「日本体育・スポーツ哲学会奨励賞」を受賞していた<sup>48)</sup>。また, 大村 (女性研究者), 樋口らの訳によって海外の体育哲学的研究が紹介され, 哲学的考察が行われていた。また, この時期の研究内容をみると, 身体, 体育, 人格形成, 身体知等々, 本質を究明する原理論的研究が多くみられたものの, ドーピング問題, 暴力問題, 勝利至上主義, 不祥事問題, 大学と地域との連携, ローカリズム (広島のスポート), スポーツ競技等々, 体育・スポーツ界における現状・現実に着目し, 批判的に究明する研究も増えていた。また, この時期の方法論をみると, 西洋哲学の合理的な方法論だけではなく, 心理学, 教育学, 文学 (ホメロスのイリアス, 近世武道伝書), 歴史学, 日本人体育学者の著書や論議等々, 幅広い分野が方法論として試みられていた。このような変化には, 「体育原理」から「体育哲学」への名称変更 (2005年6月変更) も影響を与えたと考えられる。佐藤 (2006) は, 名称変更の意義について, 「これからの体育学における哲学的研究にとって, この名称変更は, 大きな意味を持つことになる新たな一歩であった」<sup>49)</sup> と評価している。つまり, 体育原理から体育哲学になったことにより, 研究者の関心事が体育・スポーツにおける現状および現実問題へと移りつつあるのではないかと考えられる。

#### 4. ま と め

体育哲学の学問としての困難性を克服する解決策は, 方法論の明確化と現実離れしない研究領域である。そこで, 本稿では, CiNii Article を活用した文献研究を用いて, 過去のさまざまな体育哲学の研究領域と方法論を考察し, クロニック的特徴を明らかにした。先行研究の時代区分を参考に, ①1960年前後, ②1970年代から1980年代, ③1990年代から2005年, ④2006年から現在までに分け考察を進めた。その結果は, 以下のとおりである。

48) [https://up.musashi.ac.jp/pfm/japanese/researchersHtml/RT2B08007/RT2B08007\\_Researcher.html](https://up.musashi.ac.jp/pfm/japanese/researchersHtml/RT2B08007/RT2B08007_Researcher.html)  
49) 前掲書, 佐藤臣彦 (体育・スポーツ哲学研究, 2006年), 1頁。

1. 1960年前後は、体育原理（後の体育哲学）を成立させようと試みる時期であった。体育原理・体育哲学的内容および領域がみられたものの、現状・現実に着目した研究はみられなかった。方法論として主に西洋哲学の「合理的な方法論」を用いているものの、哲学的な方法論を用いた具体的な究明はみられなかった。

2. 1970年代から1980年代は、川村や佐藤などを中心に体育原理（後の体育哲学）を体系化しようと努力する時期であった。この時期は、デカルト哲学、レヴィ＝ストロース哲学などの西洋哲学を用いたより具体的な究明への試みがみられた。

3. 1990年代から2005年は、体育哲学を発展させようと努力する時期であった。2005年6月「体育原理」から「体育哲学」へと名称変更し、体育学における哲学的研究にとって、新たな一歩がスタートしていた。研究方法論の文献案内や論文の書き方および論文投稿の基礎が提案されるなど、体育哲学の基礎づくりをとおして発展策を講じていた。また、女性研究者の登場、現実問題の浮上など、多様な変化がみられはじめた。

4. 2006年から現在までは、体育哲学の定着期および研究領域の多様化期であった。体育原理から体育哲学になったことにより、研究者の関心事が体育・スポーツにおける現状および現実問題へと移りつつあった。また、西洋哲学の合理的な方法論だけではなく、心理学、教育学、文学（ホメロスのイリアス、近世武道伝書）、歴史学、日本人体育学者の著書や論議等々、幅広い分野が方法論として試みられていた。また、近年は、ダンス、オリンピックレガシーなどを研究する女性研究者の活躍が目立っていた。

本稿の「はじめに」で、体育・スポーツに渦巻く諸問題を取り上げた。体育哲学の変遷をみると、関心事が体育の概念（原理）から体育・スポーツにおける現状・現実へと移りつつあり、今後体育・スポーツに渦巻く諸問題に着目した研究が増えると考えられる。以上のように、体育哲学分野が構築してきた研究課題は、大きく体育・スポーツの概念を論理的に構成する原理と体育・スポーツの理論的・実践的現状を分析する現状批判の二つがある。体育哲学の認知度を高めるためには、現実問題に着目した研究も必要であるが、体育とは何か、体育とスポーツの概念の違いとは何かなど、未だ究明されていない原理問題も散在しており、バランス取れた研究が求められる。



## Summary

### What are the Philosophy and Principles of Physical Education?

— Focusing on methodology —

Kim HyunYong

The current research tries to confirm the methodology of Philosophy of Physical Education. I used literature research utilizing CiNii Articles. I examined the research areas and methodology of Philosophy of Physical Education and clarified the chronological feature. The results of the study are as follows.

The Philosophy of Physical Education was established around 1960. Areas of research of Philosophy of Physical Education were found but research focusing on the current problem was not found. Although methodology mainly used rational methodology of Western philosophy, concrete investigation focusing on methodology was not seen. The 1970s to the 1980s research strove to strive to systematize Philosophy of Physical Education. During this period, attempts were made to explore Philosophy of Physical more concretely using Western philosophy such as Descartes philosophy, Levi-Strauss philosophy. From the 1990s to 2005, researches developed Philosophy of Physical Education. In June 2005 “Principles of Physical Education” was renamed to “Philosophy of Physical Education.” Thus, a new step was taken in philosophical studies in Philosophy of Physical Education. During this period, various changes such as the appearance of female researchers and studies focusing on current problems began to appear. The establishment and diversification phase of Philosophy of Physical Education has extended from 2006 to the present day. Not only the rational methodology of Western philosophy but also a wide range of fields such as psychology, pedagogy, literature (Iliad of Homer, modern martial arts books), historical studies, books and discussions of Japanese sports scholars, etc. have been tried as methodologies. Also, in recent years, female researchers who study dance, Olympic legacy, etc. has been active.

**Keywords:** Philosophy of Physical Education, Western Philosophy, methodology, chronological feature